

[調査研究]

西洋古典分類における紋章付き蔵書票（一）

— Armorial Bookplates on the Old Books in Tohoku University Library —

小川 知幸

1. はじめに——西洋古典分類の新設

東北大学附属図書館本館では、地下書庫に収蔵される洋書旧分類の一般図書のなかから概ね 1850 年以前の刊行にかかるものを抜きだし、一括排架する作業を数年がかりで継続してきた。これを「西洋古典」として、2021（令和 3）年度に排架されたすべての図書の排架記号ラベル上に「古典」と押印し、OPAC にもロケーション（所蔵箇所）を登録しなおして、現在は地下書庫 B1F に仮置きされている（図 1）。

その数は、約 5,000 冊にも達すると報告されているが¹、しかし瞥見したところでは、不正確な書誌情報によって抜きだされたものや、後年の再刊行にかかる図書なども含まれていることから、再び一般図書に戻さなくてはならないものもある。そのようにして最終的に規模が確定すれば、準貴重書庫などに必要数の書架を確保して、一般図書とは別の運用を図ることになるだろう。



図 1 地下書庫の一角に仮置きされた「西洋古典」

この「西洋古典」という名称は、すでに運用されている和漢書の「古典」分類に対応しており、そこからわかるように、定義上 Classical の意味をなすものではない。それらは書物としての材料や造りが現代のそれと大きく異なることから、一般の利用や出納に支障を来すことのないよう、また、物理的な保存・修復の都合から、一般図書と管理・運用を別にするを主たる目的として作られた分類なのである。したがって、英語で表記するとすれば Old Books が適当であろう。附属図書館にはその他に貴重図書・準貴重図書の分類があるが、準貴重図書は将来的な貴重図書の「候補」と考えられているため、敢えて言えば両者とも Rare Books（稀観書）なのであり、それらと一般図書との間のグレーゾーンをつなぐ分類が近年になって要請されはじめたのであった。その背景には貴重図書等の保存体制の強化と昨今のデジタル画像化にともなう図書の利用状況の大幅な変化がある²。筆者は専門の見地から図書館の取り組みをサポートしてきた。

そのようなわけで、このグレーゾーンには、刊行年代を除けば、貴重図書・一般図書とのはざまを揺れる、さまざまな価値性のグラデーションがある。旧分類すなわち東北帝国大学時代から新制大学に至り、附属図書館が現在の川内南キャンパスに移転する（開館 1973 年）までの旧片平分類の図書を主とする「西洋古典」には、たんにその時期に購入されたというだけではない、由来や旧蔵者、入手経路等において特筆すべきものがいくつか含まれているようである。

本稿は、これを図書に付された蔵書票、とくに紋章付き蔵書票（Armorial Bookplates）の分析によって探ることを目的とする（図 2）。

1 令和 3 年度第 1 回古典資料等修復保存小委員（令和 3 年 12 月 27 日開催）配布資料 8「洋書の古典区分の新設について」

2 前近代の刊本デジタル・データベースとして本学では Early

English Books Online（1473 年から 1700 年まで）および Eighteenth Century Collections Online（18 世紀）などを契約または購入しており、オンラインで全文を参照することができる。

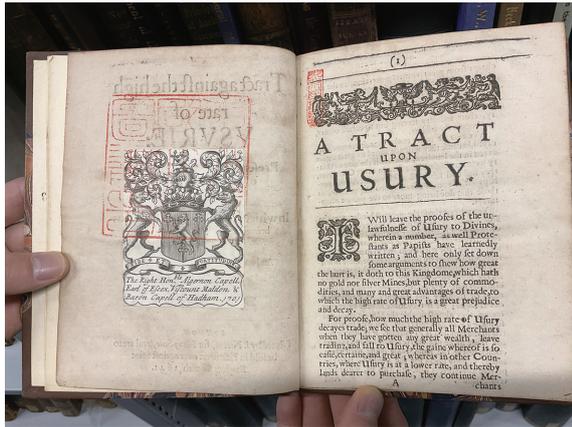


図2 「西洋古典」の図書に貼付された紋章付き蔵書票のひとつ

2. 蔵書票について

現段階では「西洋古典」の約5,000冊のうち、およそ半分近くの約2,283冊を確認し終えたところであり、そのなかから34点の蔵書票を発見した。そのうち紋章付き蔵書票は15点であった。排架記号で言えば、旧片平分類のI（総記）からII（哲学、宗教、教育）、そしてIII（歴史、伝記、地理）までに該当する部分である。

この分類はXIIまでの大分類により構成されている（表1）³。

蔵書票は、1冊に1枚ないし場合によっては2枚、また、浩瀚なシリーズではそのタイトルのすべての図書に貼付されていることがあり、まだ正確にはカウントしていないものの、枚数ではおそらくこの数倍にはなりう

表1 旧片平分類（洋書）概要

I	Generalia	総記
II	Philosophy, Religion and Education	哲学、宗教、教育
III	History, Biography and Geography	歴史、伝記、地理
IV	Philology and Literature	文献学、文学
V	Art	芸術・美術
VI	Law, Politics and Economics	法学、政治、経済
VII	Mathematics	数学
VIII	Science	自然科学
IX	Medicine	医学
X	Engineering and Technology	工学、技術
XI	Agriculture and Forestry	農業、林業
XII	Society and Industry	社会、産業

る。最大で全体の5パーセント程度の図書には蔵書票があるだろうと予想している。

ところで、一口に「蔵書票」と言ってどのようなものをイメージするだろうか。『図書館情報学用語辞典 第5版』では、「所有者を明らかにするために本の見返しに貼付する、小さな紙片。書票ともいう。一般に所有者名とともに紋章、標語、金言、図柄、絵などが美しくデザインされている」と定義している⁴。書票とは、蔵書票の略記ないしはBookplateの訳である。ラテン語ではエクス・リブリス Ex libris と言い、わが国ではブックプレートよりもこちらの用語のほうがよく知られているだろう。librisはliber(書物)の複数形の奪格であり、諸々の蔵書を意味する。exはfromの意なので、つまりは「(誰彼の)蔵書から(出てきた一冊)」という銘文であり、そのEx librisの表記の後ろに人名などが印刷や手書きで記載される(図3)⁵。

したがって、エクス・リブリスはその銘文から採られたタームであり、また、ブックプレートもテクニカルタームであって、総称といえる。つまり蔵書票と書票は同義であり、図柄と所有者名を含むテキストが併存してデザインされ、紙片に印刷されているものを指すのである。ただし、「美しく」かどうかはあくまで主観であるし、貼付される箇所も、図2からわかるように、見返し紙(Past-down Front End-Paper)だけとは限らない。これについては後述する。



図3 Ex librisの表記の下に所有者Friderici Cellarii (Cellarius)の記載がある

3 『閲覧の栞』（自昭和12年至昭和13年）東北帝国大学附属図書館の付録より。邦訳は筆者が付した。

4 『図書館情報学用語辞典 第5版』丸善出版, 2020, 「蔵書票」の項。

5 この蔵書票はPlatonis Dialogi duo: Gergias et Theaetetus emandavit et annotatione instruxit Lud. Frid. Heindorfus..., Berolini 1805 (排架記号IIA2-1/PH202), 訳せば『プラトン対話篇二篇ゴルギアス・テアイテトス』の見返し紙に貼付されていた。

他方、たんに文字だけで印刷されているものは、これをブックプレートと区別してブック・ラベル (Book label) と呼ぶ。古書には、その図書を販売した古書肆の屋号や住所などが印刷された小さな紙片が見返し紙の上端に貼付されていることがままあるが、これを蔵書票に分類しないことに留意したい (図4) ⁶。

他にも『日本大百科全書 (ニッポニカ)』では、蔵書票の特徴として「銅版、木版、石版などで趣味を凝らして刷られている」としている⁷。図版およびテキストの印刷という様式が蔵書票のいわば核心であり、その誕生と普及ともかかわるのである。

蔵書票の習慣はヨーロッパにおいて15世紀半ばに始まり広まったとされるが、これは同時期の活版印刷術の始まりと不可分であることは想像に難くない。刊本は大量生産による複製品であるため、写本であったときよりも書物一つひとつの「個性」が減衰し、それにより別の手段で、所有する書物をアイデンティファイする必要性が生じたのである。その一方で、活字によるテキスト印刷の簡便さ、版の複製の容易さなどが蔵書票の普及を後押ししたのだろう。

最古の蔵書票のひとつとして知られているのは、1480年頃のビベラッハのヒルデブランド・ブランデンブルク (Hilprand, Hiltprand or Hildebrand Brandenburg of Biberach, 1442-1514) という人物のそれだが、カルトジオ会の修道士であったというだけで、あまり知られていないこの人物をネットで検索すると、即座にその蔵書票が掲出される⁸。

この蔵書票は、主著『黄金伝説 *Legenda aurea*』で知られるヤコブス・デ・ウォラギネ (Jacobus de Voragine) の著書『四旬節の説教 *Sermones quadragesimales*』(1408年) に貼付されているという (図5)。

画像は木版で印刷されているが、テキストを含まない点では上述の蔵書票の定義から若干逸脱するかもしれない。とはいえ、その図像が「盾を持った天使」であることで、紋章付き蔵書票の嚆矢ともいえる。

「西洋古典」の図書の蔵書票には紋章付き以外にも、紋章の構成部分の一部や神話的な情景、凝った造りの

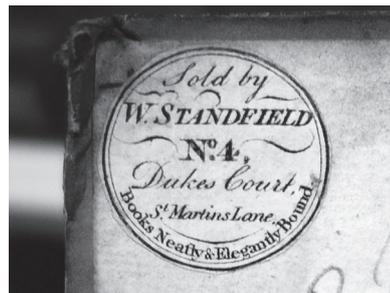


図4 ブック・ラベルの一例 蔵書票でないことに注意



図5 ヒルデブランド・ブランデンブルクの蔵書票

飾り枠などが意匠として現れるが、紋章、とくにその中心にある盾と蔵書票とは、所有者をしめす本来の機能から考えれば、その始まりから高い親和性があったのではないだろうか。

3. 紋章とは何か

3.1. 紋章の発祥

さて、紋章はヨーロッパにおいて12世紀末頃に現れたと考えられている。それは当時の貴族の戦闘形態と密接にかかわっている。馬上で甲冑に身を包んだ騎士が、自分が誰かを敵味方に識別させるために、左手にもつ盾のおもて側に幾何学模様やライオンなどの動物の具象的な意匠を描きはじめていたのである⁹。

すでに11世紀後半には、実技向上と勇敢さを誇示するために、騎士のあいだでトーナメント (Tournament) と呼ばれる馬上槍試合が始まっていたとされる¹⁰。その頃の装備はチェーンメイル (鎖帷子) などであったが、

6 このブック・ラベルは George Berkeley, *Alciphron, or the minute Philosopher in seven dialogues*, London, 1732 (排架記号 II A1/A4) より。

7 『日本大百科全書 (ニッポニカ)』小学館, 1984 - 1994, 2014, 「コトバンク」に収録。高野彰による解説。

8 画像の典拠は Wikipedia, Category:Bookplates of Hilprand Brandenburg de Bibrach より。
http://www.jsot.jp/https://commons.wikimedia.org/wiki/Category:Bookplates_of_Hilprand_Brandenburg_de_Bibrach (閲覧 2022/10)

9 スティーヴン・スレイター著; 朝治啓三監訳『図説 紋章学事典』創元社, 2019, 第1章参照。他にも、森護『紋章学辞典』大修館書店, 1998, テレンス・ワイズ著; 鈴木漢訳『中世の紋章 名誉と威信の継承』新紀元社, 2001を参照。

10 馬上槍試合は、団体戦をトーナメント (フランス語で *Tournoi*, ドイツ語では *Turnei*) と称し、一騎打ち形式としては *ジョスト* *Joste* と呼ばれ、後者は16世紀に至るまで継続した。

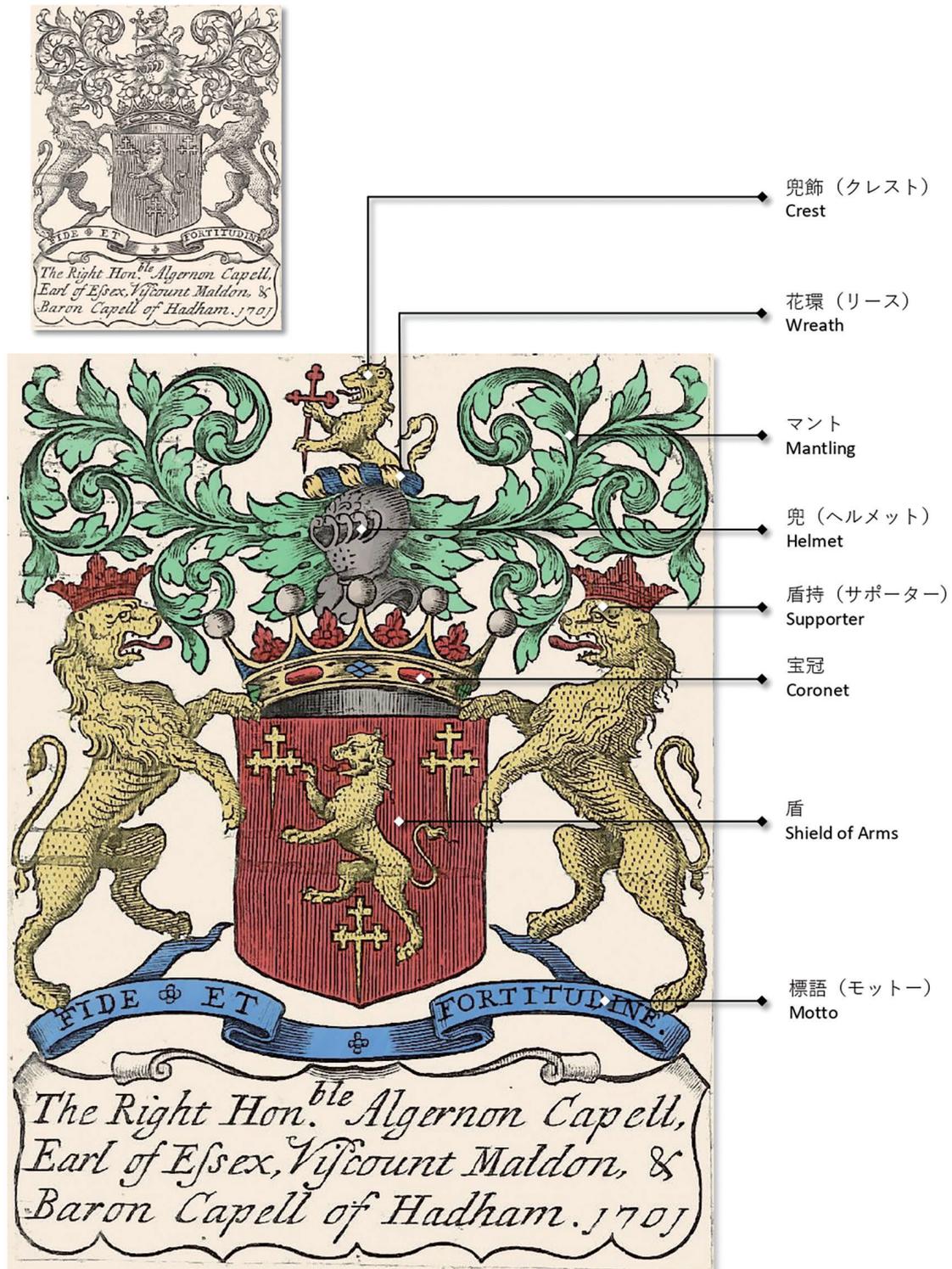


図6 紋章付きの蔵書票より紋章各部
(部位の判別のため着色)

部分的に脚部や腕部に鋼鉄板が使用されるようになり、やがて全身が鋼鉄板に覆われるプレート・アーマー（板金鎧）へと発展した。その鎧兜は剣も弓矢も通さなかったが、着用する者の自由な動きは相当に制限さ

れることになった。

15世紀までには、競技会場に姿を現す騎士の姿は重量のある板金の鎧に身体を覆われており、頭部を肩まですっぽりと覆った鉄兜により、その顔貌を垣間見る

ことは競技の相手にも周囲の見物人にもほとんど不可能であった。馬上の騎士は、突進して相手を落馬させるためのランス（騎槍）を右脇に抱え、左手には盾を携えていた。その盾のおもて側に、甲冑姿の騎士がどのような家系の、どのような素性の者であるかをしめす紋章が大きく描かれていた。競技者の紋章は競技会場の柵の上にも並び立てられ、盾持（Supporter）と呼ばれる人びとがその盾を頭上に掲げて試合の呼び出しに使った。

13世紀半ばには、既存の紋章を整理・分類し列挙した紋章とともに、それらを担う者の名を記載した「紋章鑑」（Roll of arms）が作られるようになっていたという¹¹。さらに14世紀までには「紋章官」（Herald, or Officer of arms）と呼ばれる役人が現れ、トーナメント申込みの使者や、試合のさいの行司、武具をあらためる任務などを帯びた¹²。彼らは、戦時には敵味方の紋章を識別し、戦場で誰が戦果を挙げたかを見極め、記録したという。この紋章官がおよそ紋章とそれにかかわる儀礼を統括するようになった。

紋章には、後述するように、兜や兜飾（クレスト）、宝冠（コロネット）、盾持など、さまざまな構成要素があるが、紋章＝Coat of Arms＝武具の外被という言葉からすれば、本来は武具（Arms）＝盾、外被（Coat）＝その盾を外側から被っているものを指すのである。したがって盾の上にある装飾ないし意匠が、もっとも重要な要素であったことをまず確認しておきたい。

3.2. 紋章各部の構成

それでは、紋章各部の基本的な構成について「西洋古典」の一冊の蔵書票を例にとって説明しよう（図6）。

最上部にあるのがクレスト（Crest）と称される兜飾であり¹³、その下には花環（リース Wreath）がある。さらにその下に兜（ヘルメット Helmet）がある。兜の後部にあるのは騎士がまとうマント（Mantling）であり、

あたかも茂った草木の葉が風にはためくように広がっているが、じっさいのマントの形状や襞、模様などからその様式が発展していったようである。

このマントを兜に留めているのが花環であり、その花環の上にクレストが固定されている。兜は、たいいていの場合、兜をかぶった者にとっての右を向いており（Viewer' right）、これをデクスター（Dexter）という。吉兆をしめす言葉である。逆はシニスター（Sinister）という。兜が右を向いていれば、左腕にある盾は当然、おもて側を向くはずである。したがって、これらの要素は、トーナメントに臨場し、まさに試合を控えた馬上の騎士の姿を模したものであるといえよう。

紋章の中央部分にあるのが盾（Shield of Arms）であり、その上に宝冠（コロネット Coronet）が組み合わされている。宝冠の様式が定まるのは16世紀以降だが、その形状は、王や君主の戴くそれを簡素化したものである¹⁴。

盾を両脇から支えているのが、トーナメントでは呼び出しの役割を担った盾持（サポーター Supporter）である。動物や神話上の怪物であることが多いが（よく見かけるイギリス政府の紋章は、向かって左にイングランドのライオンと右にスコットランドのユニコーンを配している）、初期には野人のような姿が描かれているものもある。先に見たように、教会などで掲げられた紋章には天使が盾を持っているようなこともあった。ただし、盾持を省いた紋章も少なくない。

さらに、盾の下にあるのが標語（モットー Motto）である。その起源は戦場での関の声だというのが、家門により世襲される場合がある¹⁵。

以上が各部の構成である。紋章は通常、あざやかな色彩を帯びているが、印刷などで表現するとモノクロームになってしまう。その場合の、点と線による色彩の表現も規則で定められている（図7）。

金属色をしめすのが銀色（アージェント Argent）と

11 イングランドにおける最初期のものとしては、1250年頃のグローバー・ロール（Glover's Roll）と称される「紋章鑑」[https://wappenwiki.org/index.php?title=Glover%27s_Roll_\(A\)](https://wappenwiki.org/index.php?title=Glover%27s_Roll_(A))（閲覧2022/10）や、1270年頃のデリング・ロール（Dering Roll）などが知られている。デリングについては鶴島博和「『歴史』の誕生」高田実・鶴島博和編著『歴史の誕生とアイデンティティ』日本経済評論社、2005所収を参照。フランスでは、1250年代のビゴ・ロール（Bigot Roll）などが、また、ドイツ（神聖ローマ帝国）ではムーリのコンラート（Conradus de Mure）による1260年代前半のクリペアリウス・テウトニコルム（Clipearius Teutonicorum「ドイツ人の紋章」の意）などが知られている。後者については、<http://www.geschichtsquellen.de/werk/1302>（同

上）を参照。

12 浜本隆志『紋章が語るヨーロッパ史』白水社、1998、第一章、また、『紋章学事典』第2章を参照。

13 ウィリアム・メッツィヒ著；中村敬治訳『西洋の紋章』美術出版社、1971では、兜飾（クレスト）を、両側についた翼や角を模した飾りなどとしており、それらの間に配された動物などの具象的な意匠は、とくに「バッジ」として区別している。ただし、この紋章のクレストには翼や角飾りは存在せず、また、そのようなタイプの紋章も多いので、上部中央のライオンの意匠をクレストとしてしめた。

14 『紋章学事典』第3章

15 上掲書、第3章

金色（オーア Or）の2色であり、銀色は無地、金色は点描でしめされる。したがって、図6の盾持とクレスト、そして盾の上のライオンと十字紋は金色であることがわかる。

また、紋章で使用される基本色には、赤色（ギュールズ Gules）、青色（アジュール Azure）、黒色（セイブル Sable）、緑色（ヴァート Vert）などがある¹⁶。図6の盾の地色（紋地）は赤色であることがわかるだろう。

色彩の表現は、視認性を重視してその規則が定められており、たとえば黒色と緑色のように、基本色と基本色とを重ねることはできない。戦場では、敵味方やその身元の瞬時の見極めが勝敗や生死の分け目であったからである。

ミシェル・パストゥロー（Michel Pastoureau）によれば、ヨーロッパの紋章には約61パーセントに赤色、約48パーセントに銀色、約42パーセントに金色、約28パーセントに黒色、約23パーセントに青色、そして約2パー

セントに緑が現れるという¹⁷。ただし、時代を追うごとに青色の割合が徐々に増えていき、これに対して赤色は減少するのだという¹⁸。

さて、つぎに紋章の中核にある盾の上の意匠について簡単に触れておこう。盾そのものの形は一般的に14世紀までにはアイロン型（Heater）と呼ばれる、先端が丸みを帯びたものであった（図8）。そのヴァリエーションの一つとして、図6のような、上部に耳の付いた「フランス型」（Eared-top French Style）と称されるものもあり、その形状から、作られた時代もおおよそ推定することができる。

盾の表面の「地」の部分を経地（Field）と言い、家門や家系により特定の色で塗られている¹⁹。

その上の図柄には、単純なものとしてはオーディナリー（Ordinary）と呼ばれる、縦帯（ペイル Pale）・横帯（フェス Fess）・斜帯（ベンド Bend）・十字（クロス Cross）や山形紋（シェブロン Chevron）などの帯状の

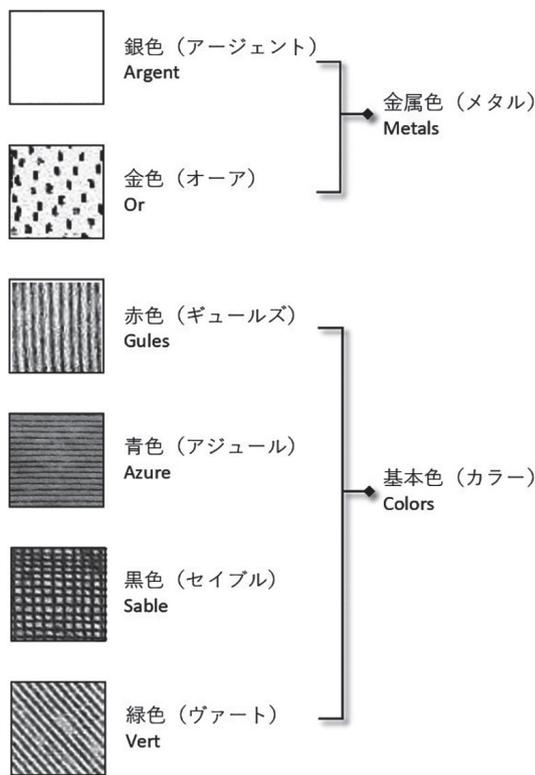


図7 点と線による紋章の色彩表現。「西洋古典」に貼付された蔵書票から作成

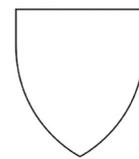


図8 アイロン型 (Heater) の盾

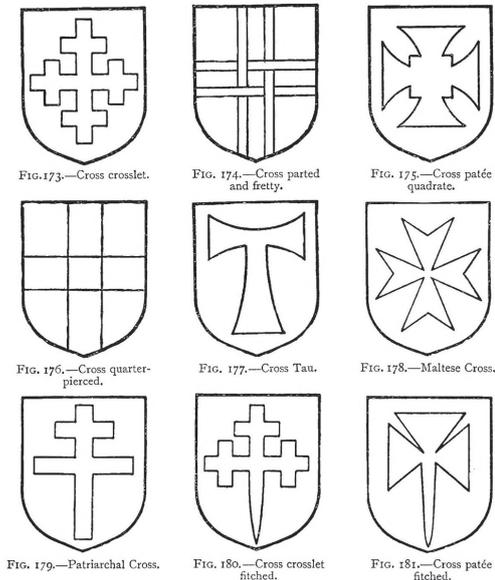


図9 十字紋のヴァリエーションの一部

16 基本色には、これ以外に紫色（パーピュア Purple）もある。線による表現としては、緑色の斜線の方向を左右反転させたものである。なお、基本色の他に「毛皮模様」があるが本稿では割愛する。
 17 M. パストゥロー著; 松村剛監修・松村恵理訳『紋章の歴史 ヨー

ロッパの色とかたち』創元社、1997、また、徳井淑子『色で読む中世ヨーロッパ』講談社、2006を参照。
 18 池上俊一『儀礼と象徴の中世（ヨーロッパの中世8）』岩波書店、2008、第4章参照。
 19 以下の記述には『紋章学事典』第4章を参照。

図形があり、また、十字の帯は「十字紋」としてさまざまなヴァリエーションをそなえている。一例として、図6の十字紋は、十字の先端にさらに小さな十字を組み合わせ、下端だけが尖っているため、クロス・クロスレット・フィッチト (Cross crosslet fitched) と呼ばれる (図9)²⁰。

紋地はこのオーディナリーによって分割されたり、動物や植物、空想上の怪物、建物その他の無生物などが描きこまれたり、家門や家系の合流により縦横に2分割されたり4分割されたりする。ライオンなどの動物の姿勢や傾きは姿態 (Attitude アティチュード) と呼ばれ、顔の向きの違いなどの様態 (Attribute アトリビュート) でも区別される。図6の盾のライオンの姿態は「ランパント Rampant」(左後ろ脚立ち) である。

いずれにしても、このような色と図柄の組み合わせにより、盾の意匠は唯一無二のものとなるのである。

4. 紋章付き蔵書票

それでは、紋章にかんする以上のような基本的知識を踏まえて、「西洋古典」分類において見出された紋章付き蔵書票を分析してみたい。

① Henry Drummond の蔵書票

図10は MM. Léchaudé D'Anisy et de Ste-Marie, Recherches sur le Domesday, ou liber censualis d'angleterre, Caen, 1842 (排架記号 IIIA8-6/L15) の見返し紙に貼付されていた蔵書票である。書名を訳せば、『ドゥームズデーすなわちイングランド検地の書の研究』となる。

所蔵者名は紋章の下部に「Henry Drummond, Albury Park, SURREY」と印刷されている。ヘンリー・ドラモンドという氏名はゴシック体、アルベリー・パークという居住地はイタリックの筆記体、サリーというロンドン近郊のカウンティ名はイタリックのローマン体と、すべて書体を変えているところが凝った造りである。

標語は上下2箇所に見られる。上部にはラテン語で Virtutem coronat honos 「徳に冠を戴かせるのは名誉」、下部には同じくラテン語で, Prius mori quam fidem fallere, 「信仰を喪うくらいなら死を選ぶ」とある。

クレストもふたつあり、花環の上に、デクスター (向かって左) には、止まり木に載るオオタカが、シニス



図10 所蔵者名に「ヘンリー・ドラモンド、アルベリー・パーク、サリー」と記載

ター (向かって右) には、止まり木のないオオタカが、顔を後ろ向きにして描かれている。ただし、こちらのオオタカには後背輪がある。

この二重性は、盾の意匠にも見られる。4分割された紋地のデクスター上とシニスター左にある波形の6つのバリー (barry: 金属色と基本色が交互になる水平分割) があり、金色の地に赤色の帯であることがわかるが、この紋章はスコットランドの由緒あるパース伯爵 (Earl of Perth) のそれである。1605年にドラモンド卿がパースシャーをあたえられて叙位されたのに始まる。

他方、この紋に組み合わされた、金色の地に2本棒の赤色のライオンの頭部の紋章は、同家がイングランド・スコットランド王ジェームズ6世 (スコットランド王として在位1567-1625年、イングランド王ジェームズ1世として在位1603-1625年) から贈られた加増紋 (Augmentation オグメンテーション) と呼ばれるものである²¹。盾 (16世紀頃の、上部の縁がふたつにえぐられた形 = Two engrailed top) には、これらのふたつの紋章が交互に配されており、十字に分割されている。

20 Arthur Charles Fox-Davis, A complete guide to heraldry, London; Edinburgh, 1909, p. 130.

21 Wappenwiki: House Drummond of Madderty.

https://wappenwiki.org/index.php?title=House_Drummond_of_Madderty (閲覧 2022/10)

この紋章は、本家ドラモンド家の11の分家のひとつ、マダーリーのドラモンド家 (House of Drummond of Madderly) 第2代のジョン・ドラモンドの息子ウィリアムより始まるさらなる分家、ストラサン (Strathallan) 子爵のドラモンド家のものである。ドラモンド卿はジャコバイト貴族としてスコットランド王に貢献した。クレストと盾の二重性はイングランドとスコットランドの、そしてふたつのモットーのうちの、上部は本家の、下部はストラサン系のものなのだろう。

この蔵書票の主であるヘンリー・ドラモンドは、1786年に生まれ1860年に没した銀行家、下院議員、文筆家として知られており、1832年のカトリック使徒教会 (Catholic Apostolic Church) の創設にかかわった一人でもあった²²。この教会はイエス・キリストの再臨を待望することを特徴としており、再臨までに選ばれた12人の「使徒」(Apostle) が生き続けることを信じたという。ヘンリーもまた使徒の一人であった。書名の「ドゥームズデー」は、1086年にウィリアム1世が作らせた検地帳ドゥームズデー・ブックのことであるが、周知のように、「審判の日」の意味がある。

ヘンリーは第10代キノール (Kinnoull) 伯爵ロバート・ハイ＝ドラモンド (Robert Hay-Drummond) の娘で、いどこであったヘンリエッタ (Henrietta) と結婚した。じつは、岳父ロバートも同じ紋章の蔵書票を使用していた²³。したがって、ヘンリーはこの家を継いで、蔵書票の意匠も受け継いだのであった。

ヘンリーとヘンリエッタは3人の息子と2人の娘をもうけたが、妻のヘンリエッタも息子たちもヘンリーより先に没した。娘のひとりルイーザ (Louisa) は第6代ノーザンバーランド公爵アルジャーノン・パーシー (Algernon Percy) に嫁してヘンリーの遺産を管理したが、1890年に没した²⁴。パーシー家には跡取りがいたが、ヘンリーの遺産が引き継がれたかどうかは不明である。おそらく、そうならなかった可能性が高い。この図書には、他に蔵書票なども見当たらず、また、戦前の帝国大学時代というよりは、戦後の受入分であるとおもわれるので、ルイーザの死後、他の蔵書とともに売り立てられ、古書肆の扱うところとなったのだろう。

② Earl of Ilchester の蔵書票

次に、図11の蔵書票は The Works of the late right Honourable Henry St. John, Lord Viscount Bolingbroke with the Life of Bolingbroke, London, 1809 (排架記号 IIIA8-6/B27) の見返し紙に貼付されていた。このタイトルは Vol. 1 から Vol. 8 まであり、蔵書票はそのすべての巻に見られる。書名を直訳すると、『かの有名なる故ボリングブルック子爵ヘンリー・シンジョン卿の著作集』とでもなるだろうか。

シンジョン (Henry St. John, 1678-1751) は18世紀前半に活躍したイングランドの政治家、著述家であり、「愛国王の理念 The Idea of a Patriot King」(1738年) などの著作で知られる。著作集は1754年に初版が出版されており、「西洋古典」のそれは1809年の新版である。

蔵書票には「イルチェスター伯爵 The Earl of Ilchester」とあり、個人名はない。イルチェスターはイングランド南西部のサマセットのカウンティにある集落であり、1756年に初代イルチェスター男爵であったスティーヴン・フォックス (Stephen Fox, 1704-1776) が同伯爵に叙せられて創設された。



図11 所蔵者名には The Earl of Ilchester とある

22 “Drummond, Henry (1786-1860)” Encyclopaedia Britannica, Vol.8 (11th ed.) Cambridge University Press.

23 University of Canterbury: Bookplate of Robert Drummond. <https://digitalvoyages.canterbury.ac.nz/omeka-s/s/provenance-project/>

item/545 (閲覧2022/10)

24 Wikipedia: Algernon Percy, 6th Duke of Northumberland. https://en.wikipedia.org/wiki/Algernon_Percy,_6th_Duke_of_Northumberland (同上)

果たして、この紋章には盾持として2匹のキツネが描かれ、シニスターのキツネは金色であり、デクスターのそれは毛皮紋様である。創設者フォックスにちなんでのことであろう。モットーには *Faire sans dire*, 「不言実行」とある。

盾は4分割され、右上と左下にはアーミン (Ermine: オコジョの毛皮模様) の紋地に青色の山形紋 (Chevron) が描かれ、その上に3匹のキツネの首が乗っている。また、右上には黒地に赤色の縦しまのかかった2頭のライオンのパッサント (Passant: 歩き姿) が描かれている²⁵。このライオンの紋章との合成は、1758年にフォックスが勅許により母方の祖母のストラングウェイズ (Strangways) 姓を追加されたことで Fox-Strangways 姓となったことをしめすものである。ここまでは、まさしくイルチェスター伯爵の紋章である。

しかし、よく見ると左下には、黒地に3匹の白色 (= 銀色) の猟犬がパッサントで描かれた別の紋章がひとつだけ組み合わされている (図 11a)。

これはいったい何か。イルチェスター伯爵のフォックス・ストラングウェイズ家の直系ではないことは確かである。この微妙な違いにより、蔵書票の持ち主個人を特定する手がかりとなりうるのではないか。

結論から言えば、この猟犬の紋章はホーナー (Horner) 家のそれである²⁶。ホーナー家は11世紀のノルマン・コンクエストとの関係をほのめかされ、フォックスと同じくサマセットのカウンティに居を構えていたようだが、遅くとも13世紀後半にはイングランド東部のケンブリッジシャーにあるハンティンドンシャー (Huntingdonshire) に現れた家門であった。猟犬は、正確にはタルボット・ハウンド (Talbot Hound) と

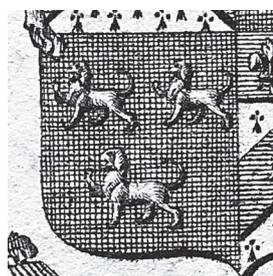


図 11a 盾左下の、黒色紋地に3匹の猟犬の紋章

いう、現在は絶滅した犬種であり、鹿狩り用として貴族に珍重された。

1736年にこのホーナー家からスティーヴン・フォックスのもとに嫁したのが、当時まだ13歳のエリザベス・ホーナー (Elizabeth Horner) であった²⁷。1756年にフォックスがイルチェスター伯爵に叙せられると、エリザベスは伯爵夫人となり、4人の娘と3人の息子を成人させ、1776年に未亡人となった後も1792年まで生きた。息子の一人ヘンリー・トーマスは第2代イルチェスター伯爵になったが、ホーナー家の紋章を引き継ぐのは女系であったかもしれない。とすれば、図書が出版された1809年にまだ存命であった娘のフランシス・ミュリエル (Frances Muriel, † 1814) か、スザンナ・サラ＝ルーザ (Susannah Sarah Louisa, † 1827), あるいはハリエット・アークランド (Harriet Acland, † 1815) が考えられるが、ハリエットは夫とともにアメリカに渡っている。

だが、そもそも「イルチェスター伯爵」の称号を、彼女たちが引き継ぐことはできたのだろうか。

ここから先は残念ながら、なおも不明である。蔵書票はエリザベスに発する、フォックス家とホーナー家の合流とイルチェスター伯爵の称号を表現しており、エリザベスの死後にあっても、シンジヨンの浩瀚な著作集などにこれを貼付して大切に扱っていたと推察される。だが、いずれかの時点で、遺産としての蔵書は手放されたのであろう。

図書は昭和39 (1964) 年に附属図書館に受入れられた。したがって、これも①と同じく新制大学になってからの購入・受入分であり、直接の入手経路は古書肆と考えられる。

③ Bibliotheca Lindesiana の蔵書票

図 12 は、The Works of Aristotle, translate from the Greek..., by Thomas Taylor, in nine volumes, London, 1812 (排架記号 IIA2-1/AR49) の第7巻に貼付されていた蔵書票である²⁸。書名は『アリストテレス著作集』であり、全9巻だが、蔵書票のあるのはこの第7巻のみであった。ゴシック文字でビブリオテカ・リンデシアー

(同上)

28 副題は、The treatises on the parts and progressive motion of animals; the problems; and, the treatise on indivisible lines となっており、直訳すれば「動物の部位と前進運動、その問題、および不可分線についての論考」である。それぞれ「動物部分論」「動物進行論」「不可分の線について」として知られている。

25 European Heraldry: House of Fox.

<https://europeanheraldry.org/united-kingdom/families/families-e-g/house-fox/> (閲覧 2022/10)

26 House of Names: Horner History, Family Crest & Coats of Arms.

<https://www.houseofnames.com/horner-family-crest> (同上)

27 Wikipedia: Elizabeth Fox, Countess of Ilchester.

https://en.wikipedia.org/wiki/Elizabeth_Fox,_Countess_of_Ilchester

ナ (Bibliotheca Lindesiana), すなわち「リンデシアーナ文庫」と記載されており, その下に 90/H と記されている。附属図書館の分類ではないので, これはもともとの所蔵者の分類による記載であろう²⁹。

紋章のクレストはスワンであり, 花環ではなく, 形状から見ておそらく公爵の宝冠によって兜とつながれている。つまり, 兜は宝冠を戴いているように描かれ, その兜も曲面をつけた板によって視界を大きくとったタイプである。このような兜は儀礼的なトーナメントなどで使われた高価なものであるらしい。

盾持は2頭のライオンが向かい合い, シニスターではランパント・ガーダント (rampant guardant) と呼ばれる, 左後ろ脚立ちで顔は正面に向けた姿勢をとっている。デクスターのライオンはこれと鏡像の関係にある。

その盾持が支える盾の意匠は, 4分割されて左上・右下と右上・左下にそれぞれ同じ2種類の紋章が組み合わされている。一方は, 赤地に銀色と青色のチェック柄の帯があり, 他方は金地にランパントの赤色のライオンが上から黒色の斜帯 (ベンド) を引かれている。最上部には Endure fort, 直訳すれば「勇敢に持ちこたえよ」とのモットーがある。

この紋章は, クロフォード伯爵 (Earl of Crawford) のそれである³⁰。14世紀末にスコットランドの爵位として, デヴィッド・リンジー卿 (Sir David Lindsay) にあたえられたのが始まりだという, 現存する由緒ある称号である。

リンジー家の, もとの紋章は赤色の紋地に銀色と青色のチェック柄の帯が横懸になったものであり, 一方, 金色の紋地に赤色のライオンのほうは本来アバネシー (Abernethy) 家のものであった³¹。アバネシー家は12世紀にパースシャーのアバネシー (ネシー川の河口の意) に現れたスコットランドの家系であり, 1325年頃にアレクサンダー・アバネシーの娘マリアがデヴィッド・リンジー卿のもとに嫁している³²。このときふたつの紋章が合成されたと考えられる。また, クロフォー



図12 所蔵者名は「ビブリオテカ・リンデシアーナ」

ド伯爵は15世紀末にスコットランド王ジェームズ3世によりモンローズ公爵 (Duke of Montrose) に叙されている。クレストの下にある公爵の宝冠は, おそらくこの事実にもとづいているのだろう。

Bibliotheca Lindesiana の名称の由来もこれで解明される。「リンジー家の文庫」というわけである。

それでは, この文庫を作ったのは誰なのか。リンデシアーナ文庫は第25代クロフォード伯爵アレクサンダー・リンジー (Alexander William Crawford Lindsay, 1812-1880) およびその息子である第26代クロフォード伯爵ジェームズ・リンジー (James Ludovic Lindsay, 1847-1913) により創られ, 拡充されたという³³。アレクサンダーは歴史家・収集家として, 息子のジェームズは天文学者としても知られ, 王立天文学会の会長職

29 全巻揃いだが, 出処の異なる同一タイトルによって取り揃えたようにおもわれる。

30 European Heraldry: House of Lindsay. <https://europeanheraldry.org/united-kingdom/families/families-1-n/house-lindsay/> (閲覧 2022/10)

31 House of Names: Abernethy History, Family Crest & Coats of Arms. <https://www.houseofnames.com/abernethy-family-crest> (同上)

32 The Peerage: A genealogical survey of the peerage of Britain as well

as the royal families of Europe; Person Page-2116.

<https://www.thepeerage.com/p2116.htm> (同上) ちなみに, マリアはアンドリュウ・レスリー卿 (Sir Andrew de Leslie of Leslie) と結婚していたが, まもなく未亡人となったためリンジー卿と結婚することになったという。

33 Wikipedia: Alexander Lindsay, 25th Earl of Crawford. https://en.wikipedia.org/wiki/Alexander_Lindsay,_25th_Earl_of_Crawford (同上)

を務めた。スコットランド国立図書館のサイトでは、同文庫にかんする14点の目録がヒットする³⁴。それらを見ると、王立天文台のコレクションや、17世紀から18世紀にかけてのバラッドのコレクション、ブロードサイドのコレクション、漢籍コレクション、東洋・アラビア・ペルシア・トルコの写本コレクション、デ・ブリー (Johann Theodor De Bry: 16世紀の彫刻家・出版者) のコレクション、切手コレクションなど多岐にわたっている。目録は1877年から1913年にかけて出版されている。おそらく自費での限定出版であろう。年代からすればジェームズの企図によるものと推定される。

リンデシアーナ文庫は居住地であるランカシャーのハイ・ホール (Haigh Hall) に所蔵されていたが、ジェームズは1888年、エディンバラ王立天文台の閉鎖にさいして新天文台建設のための費用捻出のために文庫の一部を寄附したという。また、マンチェスター大学のジョン・ライランズ図書館 (John Rylands Research Institute and Library) では、1901年に図書館の創設者エンリケタ・ライランズ夫人 (Enriqueta Augustina Rylands) が6,000冊以上の写本を購入したというので³⁵、この図書館にもリンデシアーナ文庫の一部が所蔵されているのである³⁶。その後も、同文庫の一部は上記のスコットランド国立図書館に寄贈・寄託されたり、その他の図書館等に配布されたりしたという。よって、現在ではこの文庫のかなりの部分が公共施設等に分散して所蔵されていることになる。

附属図書館には大正15 (1926) 年1月30日に受入れられている。この年代から推測するに、本学法文学部の初代教授たちが続々と欧州等に留学していた時期に、現地で入手し購入したものではないだろうか³⁷。他に蔵書票や蔵書印、書き込み等はない。装丁もおそらくオリジナルのカーフ装である。とすれば、ジェームズ・リンジー本人によって図書館などに寄贈・配布された一部の蔵書が、複本などの理由により登録以前に売却された可能性がある。全9巻のうちの第7巻の1冊のみに蔵書票があることも、そのような状況を推察させる。

④ Fullerton of Carstairs の蔵書票

図13の蔵書票は、*Histoire de Timur-Bec, connu sous le nom du grand Tamerlan, empereur des Mogols et Tartares. Ecrite en persan par Cherefeddin Ali natif d'Yezd, Auteur contemporain. Traduite en François par feu Monsieur Petis de La Croix..., A Delf, 1723. Tom.1-4* (排架記号 IIB3/T9) の見返し紙に貼付されていた。書名を直訳すると『偉大なるタメルランの名で知られるティムール・ベックの業績』となる。著者の Cherefeddin Ali natif d'Yezd とは、ティムールの記者であったシャラフアッディーン・アリー・ヤズディ (Sharaf ad-din ali Yazdi) のことであり、タメルラン (Tamerlan) とは1370年にティムール朝を開いたティムールを指す。したがって、これはザファルナマ (Zafarnama) すなわち「勝利の宣言」と訳される書物のフランス語訳書であることがわかる (図14)。訳者のペティ・ド・ラクロワ (François Pétis de la Croix, 1653-1713) はフランスの東洋学者で、トルコ語・ペルシア語・アラビア語を学び、宮廷や中東各地で通訳や翻訳者とし



図13 所蔵者名は「フラートン・オブ・カーステアーズ」と記載

34 National Library of Scotland. 'Bibliotheca Lindesiana catalogues.' <https://digital.nls.uk/bibliotheca-lindesiana-catalogues/archive/103427503> (同上)

35 Wikipedia: Enriqueta Augustina Rylands.

https://en.wikipedia.org/wiki/Enriqueta_Augustina_Rylands (同上)

36 John Rylands Research Institute and Library: Our History. [https://](https://www.library.manchester.ac.uk/rylands/about/our-history/)

www.library.manchester.ac.uk/rylands/about/our-history/ (同上)

37 小川知幸「東北帝国大学附属図書館の蔵書形成—特殊文庫の成立をめぐる—」『図書館文化史研究』= Journal of the Japan Association of Library and Information History 35, pp. 73-108, 2018 参照

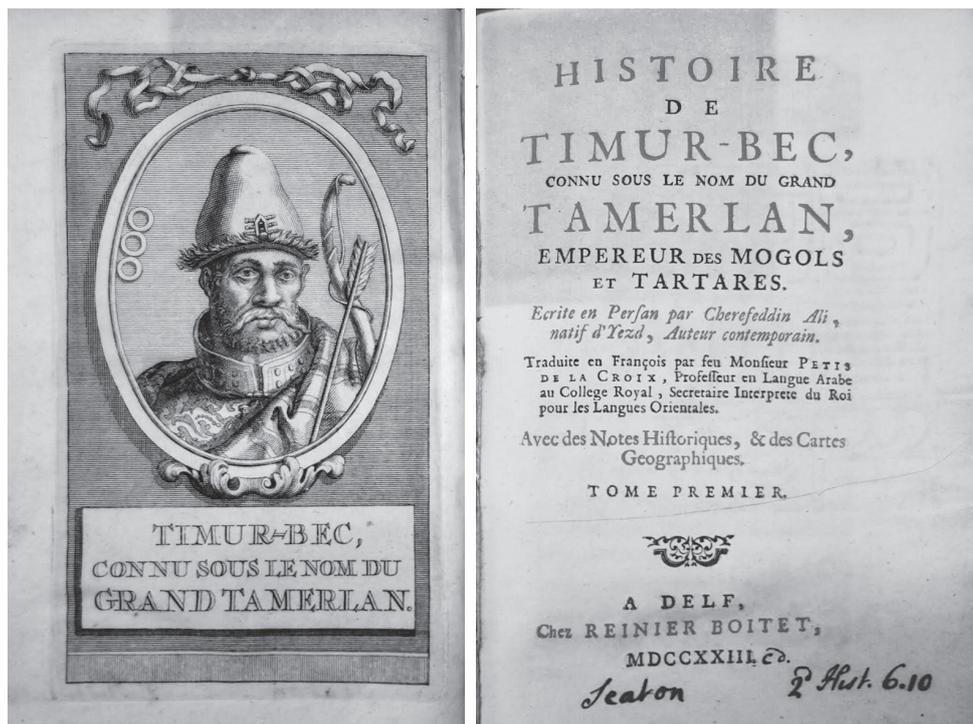


図14 『ティムールの業績』(勝利の宣言) 扉絵と標題紙 想像によるティムールの肖像画がある

て活躍したという³⁸。初版はパリで1722年に刊行されており、この図書は翌年のデルフト版である。

このような訳書の存在には、当時のフランスにおける重商主義や中東貿易を背景にした大帝国ティムールの文化や歴史などへの関心の高まりがあったとおもわれるが、それについてはひとまず措くとして、図13の紋章はいったい誰のものであったのだろうか。クレストにはラクダの頭部が描かれ、兜は目庇のあるタイプである。盾の形はロココ調の複雑な曲面によって作られており、その上には銀色の紋地に赤色のシェブロン(山形紋)が上下を分割し、上部に2頭、下部に1頭のカワウソの頭部が描かれている。モットーは、ラテン語でLux in Tenebris, すなわち「暗闇のなかの光」である。

この紋章は、スコットランド・アイルランド系のフラートン(Fullerton)家のそれである³⁹。その祖先は13世紀半ばのエアシャー(Ayrshire)にまで遡ることができるという。紋章の下にあるフラートン・オブ・カーステアーズ(Fullerton of Carstairs)という記載からもフ

ラートン系であることは証明されるのだが、一方で、居住地であるカーステアーズとは、スコットランド南部のラナークシャー(Lanarkshire)にある集落であり、ここを居住地とした人物として挙げることができるのは、ウィリアム・フラートン・オブ・カーステアーズ(William Fullerton of Carstairs, 1720-1806)ただ一人である。

このウィリアムの経歴については、証言がきわめて乏しい。ひとつは、少し回りくどいのだが、ウィリアムの娘のエリザベスが、イギリス東インド会社のスコットランド船の船長から同取締役になり、そして最後は会長にまで上り詰めたウィリアム・エルフィンストーン(William Elphinstone, 1740-1834)という人物に嫁していたという証言である。エルフィンストーンはこれにより、フラートンの姓も併せて名乗ることになったという⁴⁰。

もうひとつは、スコットランド国立ギャラリー(National Galleries Scotland)にある、ウィリアム・オブ・カーステアーズを描いたとおもわれる絵画の存在である⁴¹。その解説

38 Encounters with the Orient.
<https://www.kent.ac.uk/ewto/projects/anthology/croix.html> (閲覧2022/10)

39 House of Names: Fullerton History, Family Crest & Coats of Arms.
<https://www.houseofnames.com/fullerton-family-crest> (同上)

40 Gazetteer for Scotland: William Fullerton Elphinstone. <https://www.scottish-places.info/people/famousfirst3229.html> (同上) 結婚以前エリザベスは東インド会社の職員であつたらしい。

では、別のフラートン系であるエディンバラ近郊クレイグホール (Craighall) のフラートン家が東インド会社と深くかかわっており、そこで財をなしたジョン・フラートンの弟が、このウィリアムであった可能性が示唆されている。

ウィリアムは1762年にジョージ・ロックハート卿 (Sir George Lockhart, 3rd of Carnwath? 1700-1764) からカーステアーズの領地と男爵位を購入し、翌年エディンバラの自由市民になつたらしい。カーステアーズの邸宅には、しばしば友人のローウィス船長 (Captain Ninian Lewis, † 1790) を招き、自身も東洋を旅したりしたという。絵画はその二人の会見のようすを描いたものようである。

蔵書票は、おそらくこのウィリアムのものであると考えて間違いないだろう。その経歴には不明な部分が多いとはいえ、蔵書であった図書のタイトルや親族・交友関係から判断するに、彼の関心やなりわいは、明らかにインドや中東方面にあった。

図書は、東北帝国大学時代の昭和15 (1940) 年9月25日に購入されている。ヨーロッパではドイツ軍が戦線を拡大し、ソ連がバルト三国に侵入して併合をはじめた頃であり、日本も南方に侵出しはじめていた。日独伊三国同盟条約締結はこの2日後である。そのような状況でも、わが国では洋書を購入しつづけていたのである。

ちなみに、上記の絵画には、入手方法として「1936年にW. M. フラートン嬢により遺贈された (bequeathed by Miss W. M. Fullerton, 1936)」とコメントされていた。とすれば、本書を含む他の遺産についてもこの時期に併せて処分された可能性がある。

⑤ William Bateman の蔵書票

図15は一風変わった紋章付き蔵書票である。Thomas Hobbes, *Elementa Philosophica de Cive*, Amsterodami, 1669 (排架記号 IIA2-2/HT15) の見返し紙に貼付されていた。トマス・ホッブズ (1588 - 1679年) の『市民論』である。同タイトルは1641年にラテン語初版が出版され、その後1642年と1647年に改訂版、1651年に英語版が出版された。同年には主著『リヴァイアサン』も出版されている。したがって、わずかに遅い版ではあ

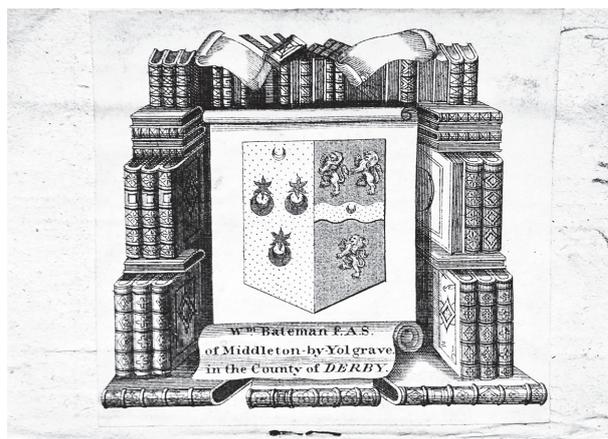


図15 所蔵者名は「Wm Bateman F.A.S. of Middleton-by-Yolgrave in the County of Derby」



図16 ホッブズ『市民論』(1669年) 標題紙

るが、初版 (パリ刊) では匿名だった著者名もしっかりと入っており、ホッブズの名はこの頃には世に知れ渡っていたことが示唆されている (図16)。

出版地はアムステルダムである。本国では出版が禁じられていたのに対し、外国では比較的自由に出版され、部数を伸ばしていたのではないだろうか。

図書は24折の小型版のため、蔵書票は右に90度傾けて貼付されている。書物を台座と堅牢な柱に見立て

41 National Galleries Scotland. [https://www.nationalgalleries.org/art-and-artists/5423/william-fullerton-carstairs-1720-1806-and-captain-](https://www.nationalgalleries.org/art-and-artists/5423/william-fullerton-carstairs-1720-1806-and-captain-ninian-lowis-died-1790)

ninian-lowis-died-1790 (閲覧 2022/10)

たこのスタイルは、「書物の柱」(Pillar of Books) などとも呼ばれるが、その中心に巻物を広げたように(=カルトウーシュ) 掲示されているのが盾の紋章である。

紋章は縦に2分割(パー・ペイル per pale) され、デクスターには金色の紋地に三つの三日月と、その先端に「6本の波形光を放つ星形」(エストワール estoile) が接している。その上部にはひとつの小さな三日月がある。

一方、シニスターには赤色の紋地に3頭の金色のライオンがランパントで描かれ、その上下を金色の波形の横帯(フェス) が分割している。フェスの上には、これも小さな三日月が描かれている。

カルトウーシュの下部には、William Bateman F.A.S. of Middleton-by-Yo(u)lgrave in the County DERBY, すなわち「ダービーシャーにあるミドルトン=バイ=ユーलगレイブのウィリアム・ベイトマン」とある。このウィリアム・ベイトマン(1787-1835年)は、アマチュアの考古学者、古物収集家、好古家であり、いくつかの文庫や博物館を作った人物として知られる⁴²。同じく考古学者として知られる一人息子のトマス(1821-1861年)のほうが、ロンドン考古協会のフェローにもなったことで若干著名なのだが⁴³、彼が13歳のときに父ウィリアムが死去したため、父の作った文庫や博物館を、まだ存命であった祖父(同名のトマス)とともに拡張するなど、父の遺志を継いで活躍したという⁴⁴。

ところで、トマスには父ウィリアムとは別の、自身の蔵書票があり、それは図15の蔵書票の、盾の部分のデクスター(向かって左)の部分を意匠としている(図15a)⁴⁵。ミドルトンのベイトマン家のモットーである Sidus adsit amicum(ラテン語で「わが預言の星が現れる」の意)との記載もある。波光星(エストワール)はミドルトン家の紋章の核心であったことがわかる。

それでは、盾のシニスター(向かって右)のライオンの紋章は誰のものなのか。

ウィリアムは1820年に、ジェイムズ・クロンプトン(James Crompton of Prestolee and Brightmet in Lancashire)

の娘メアリ・クロンプトン(Mary Crompton)と結婚した⁴⁶。ウィリアム33歳、メアリ19歳であった。すでに推察されるように、赤色の紋地に金色の波形フェス、ランパントの3頭のライオンのこの紋章は、妻のクロンプトン家のそれであった⁴⁷。

したがって、蔵書票の紋章はウィリアムとメアリの婚姻により両家の紋章が組み合わされて作られたのであり、息子のトマスがこれを継承していないことを考えあわせれば、ウィリアムただ一代の個人の紋章なのであった。さらには、フェスの上にある小さな三日月は、クロンプトン家の紋章には存在しない。ウィリアムの、メアリとの強い絆を感じさせる。これらのことにより、蔵書票は1820年以降に作られ、没年の1835年までの最大で15年間使用されたであろうことが推定される。

その後、息子のトマスも40歳で死去してしまい、さらに、その息子トマス=ウィリアム(Thomas William Bateman, 1852-95)は、それまでのコレクションの多くを売却してしまったという。一部は当時のシェフィールド市立博物館(Sheffield City Museum, 現 Weston Park Museum)が購入した。1893年のことであった。また、個人に売却したものもあるらしい⁴⁸。



図15a (参考)トマス・ベイトマンの蔵書票

42 Nat Gould: William Bateman 1787-1835. http://www.natgould.org/william_bateman_1787-1835 (閲覧2022/10)

43 Wikipedia: Thomas Bateman. https://en.wikipedia.org/wiki/Thomas_Bateman (同上)

44 Derbyshire Heritage: Thomas Bateman archaeologist. <https://derbyshireheritage.co.uk/people/thomas-bateman/> (同上)

45 Picture the Past: Bateman Coat of Arms, 4 volume, Lyons Magna

Britannia. <https://picturethepast.org.uk/image-library/image-details/poster/dchq200097/posterid/dchq200097.html> (同上)

46 上記 Nat Gould より。

47 House of Names: Crompton History, Family Crest & Coats of Arms. <https://www.houseofnames.com/crompton-family-crest> (同上)

48 上記 Wikipedia: Thomas Bateman.

公的な施設が購入したもの以外であれば、個人から個人へ、また、古書肆へと流れたものもあるだろう。この図書は大正14(1925)年9月9日受入分である。じつは、遊び紙(Front-end free-paper)のレクター(おもて側)に2種類の書き込みがあり(図17)、これを見るに、おそらく1894年10月20日に「Rich M. Laekim」という人物が入手し、その後しばらくたってから、東北帝国大学法文学部助教授の堀経夫(経済学者、帰朝後に教授、1896年生-1981年没)が現地で購入したと推測される。堀は1923年から1925年までイギリスを中心に留学していたからである。

⑥ Algernon Capell の蔵書票

最後に、「紋章各部」の説明において取りあげた紋章付き蔵書票を分析したい(図18)。これはA Tract against the high rate of Usurie: Presented to the high court of Parliament..., London, 1641(排架記号VIF5-1/T5)に貼付されていた(図2)⁴⁹。見返し紙ではなく、標題紙(タイトルページ)のヴェルソー(うら側)にである。

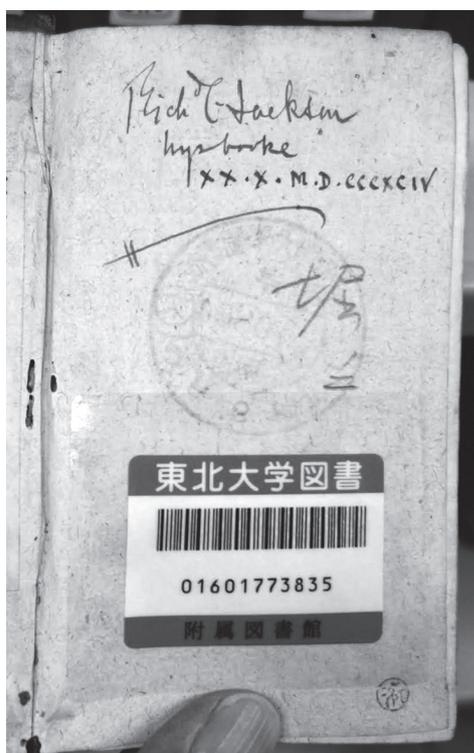


図17 遊び紙の上半分に2種類の書き込みがある

著者名は記されていないが、トマス・カルペパー(Thomas Culpepper, 1578-1662)による『反高利(小)論』と呼ばれる。初版は1623年に刊行されており、これは1641年の再版である。カルペパーはイングランドの政治家、下院議員であり、ピューリタン革命のさいには王党派を支持した人物である。

すでに図6にもとづいて記述した通り、デクスターの兜の上に花環と金色のライオンのクレストが載っており、盾持は赤色の宝冠を戴いたランパントの金色のライオンが2頭(向かい合わせの場合はコンバタントと言い、lions rampant combatantと記述)、盾には豪華な宝冠が組み合わされている。盾の紋地は赤色で、その上にはランパントの金色のライオンと三つの十字紋クロス・クロスレット・フィッチトが配されている⁵⁰。

モットーはFide et Fortitudine、「信仰と不屈の精神により」である。

この盾および宝冠の紋章はエセックス伯爵(Earl of Essex)のそれであり、紋章全体としてはカペル家(House of Capell, or Capel)のものである⁵¹。エセックス伯(爵)



図18 所有者名に「エセックス伯爵マルドン子爵アルジャーノン・カペル」の記載がある

49 排架記号がVI(法学, 政治, 経済)であることから、精査したIからIIIまでの範囲とは違っているが、この蔵書票を知ったことで筆者は調査を開始したという経緯がある。

50 よく見れば、クレストのライオンも同じ形の十字架を携えて

いることがわかる。

51 European Heraldry: House of Capell/Capel.

<https://europeanheraldry.org/united-kingdom/families/families-f/house-capellcapel/> (閲覧 2022/10)

は12世紀まで遡る由緒ある家系だが、王権の盛衰とともに消滅と復活を繰り返した。

まず、ハダムのカペル男爵 (Baron Capell of Hadham) として貴族に昇格したのは、アーサー・カペル (Arthur Capell, 1608-1649) という人物であった。彼はピューリタン革命において王党派として敗北し、国王チャールズ1世とともに処刑された。しかし、その後息子である同名のアーサー (1631/32-1683) は王政復古によりチャールズ2世からエセックス伯爵位をあたえられ同爵位が復活した。だが、アーサーは1683年にチャールズ2世とヨーク公ジェームズ (のちのジェームズ2世) を亡きものにせんと企図したライハウス陰謀事件に加担したとして、ロンドン塔の捕囚として死んだという⁵²。そして、第2代のエセックス伯爵の称号を帯びたのが、さらにその息子であるアルジャーノン (Algernon Capell, 1670-1710) であった⁵³。

アルジャーノンは父の遺したハートフォードシャー (Hertfordshire) のカシオベリー・ハウス (Cassiobury House) を居城として、1691年からウィリアム3世の侍従長、1692年からアイルランド統監 (Lord-Lieutenant of Ireland)、1693年からは竜騎兵隊長として戦い、1701年には准将の地位を得た。アン女王の枢密顧問官も務め、軍人・宮廷人として華々しく活躍した人物であった。

しかしながら、彼はわずか39歳でこの世を去った。一方、母のエリザベスはそれより長く生き、1718年2月に61歳で他界したという⁵⁴。

ところで、トロント大学図書館の British Armorial Bindings (装丁に捺された紋章) の解説には、「1718年3月31日にエクセター取引所の D. Browne の倉庫でエセックス伯爵夫人の蔵書が (中略) 売却された」という記述がある⁵⁵。だとすれば、これにアルジャーノンの蔵書も含まれていた可能性はないだろうか。彼はカシオベリー・ハウスに、規模は不明だが父の蔵書も受け継いでいた⁵⁶。図書が1641年出版であるのは、アルジャーノンよりも、父を飛びこえて、祖父のアーサーの年代

にさえ相当するだろう。蔵書票にあるように「1701」年というタイミングで、受け継いだ蔵書を改めて整理し、自身の蔵書票を付したのだろう。彼の死後は、それらを母親が管理したと推測するのは、あながち間違いではないようにおもわれる。

この図書は大正14 (1925) 年7月31日に附属図書館に受入れられている。じつは、全29ページの薄い冊子体であり、装丁を見ると板紙・背革装だが、見返し紙や遊び紙は比較的新しい。造りや革の状態、背文字などから19世紀から20世紀に入るまでの製本様式と推定される。

蔵書票がタイトルページのうら側に貼付されていたのは、少なくともアルジャーノンが所蔵していた頃には本文部分が装丁されていなかったからだろう。まさにパンフレットの形状そのものだったといえる。

その後、図書の売立てにあたって製本業者により、ある程度の冊数をまとめて装丁されたと考えられる。もともと表装がついていなかったために、製本時にこの蔵書票が剥ぎ取られるようなことにならずにすんだのである。

5. むすびにかえて

以上で、「西洋古典」において発見した15点のうち6点の紋章付き蔵書票を、その所有者の家系や経歴、そして入手経路などの観点から分析した。

それらの6点の蔵書票の所有者の居住地を、改めて地図に起こせば図19のようになる。

イングランド南部ロンドン近郊の①から、②の南西部サマセット、③の中部ランカシャー、④のスコットランド南部へと北上し、また、⑤の中部のダービーシャー、⑥の南東部ハートフォードシャーへと南下して、大きく一周するような軌跡を描いた。事例が少ないため偶発的な可能性はあるが、特定の地方に偏在するようなことはなかった。強いて言えば、6点すべてがイギリス産であったことであろう。

52 The Peerage: Arthur Capell, 1st Earl of Essex. <http://www.thepeerage.com/p1150.htm#i11496>; Britannica: Rye House Plot. <https://www.britannica.com/event/Rye-House-Plot> (同上) 一説には、喉を掻き切って自害したという。

53 The Peerage: Lt.-Gen. Algernon Capell, 2nd Earl of Essex. <http://www.thepeerage.com/p1368.htm#i13677> (同上)

54 Wikipedia: Elizabeth Capell, Countess of Essex. https://en.wikipedia.org/wiki/Elizabeth_Capell,_Countess_of_Essex (同上)

55 University of Toronto Libraries: Capell, Algernon, 2nd Earl of Essex

(1670 -1710). <https://armorial.library.utoronto.ca/stamp-owners/CAP001> (同上) D. Browne とはおそらく Daniel Browne であろう。同名の著者により1719年に *Bibliothecæ selectæ: or, a collection of the libraries of several eminent persons, deceas'd, consisting of very choice books ... to be sold ... on ... 1718/19. at D. Browne's warehouse* という著名な物故者の蔵書の販売精選カタログが出版されている。

56 Book Owners Online: Algernon CAPELL or CAPELL, 2nd Earl of Essex 1670-1710. https://bookowners.online/Algernon_Capell_1670-1710 (同上)

また、それらの人物は、17世紀後半から18世紀初め(⑥)、18世紀(②)、18世紀後半から19世紀半ばまで(①④⑤)、19世紀半ばから20世紀初め(③)を生きた人びとであり、年代的には300年近くの広がりがあった。ただし、18世紀後半からの人物が半数を占めていた。

その家系は、13世紀半ば(④)、14世紀末(③)、16世紀から17世紀(①⑥)、18世紀(②)にまで遡る。

さらに、蔵書を手放した年代を見れば、特定が困難な場合もあったが、およそ18世紀初め(⑥)、19世紀初め(②)、19世紀末にかけて(①⑤)、20世紀初め(③)、そして20世紀半ば(④)と、全体として200年余りの幅があった。

ヒルデブランド・ブランデンブルクの蔵書票でも確認したように、15世紀後半の個人蔵書票の始まりからおよそ200年あまりを経て、このような貴族の系譜に連なる人びとのあいだでは、遅くとも18世紀までには、その個人蔵書に紋章付きの蔵書票を付すようになっていたことが明らかである。

君主や貴族による、豪華で閉鎖的ないわゆる領主図書館(室)はすでに16世紀半ばから現れるのだが⁵⁷、⑥のアルジャーノンが父祖の蔵書を引き継いだように、また、②のリンデシアーナ文庫のリンジー家の2代がさまざまな分野の図書資料を精力的に収集し分類整理したように、貴族が家門の蔵書を継承する習慣は、少なくとも20世紀の初めまでは継続したのである。

一方で、②のフォックスが妻の家門の紋章を組みこんだ新たな紋章を作り、⑤のベイトマンが書物の柱に妻の家門との強い絆をしめす紋章を配したのを見れば、一個人のものとしての性格をもつ文庫を形成する傾向も併存していた。

ところで、図書資料は利用されなければ死蔵となる。だから、人手に渡ることで息を吹き返すこともある。ベイトマンの蔵書の多くは1893年にシェフィールド市立博物館に売却され、リンデシアーナ文庫の一部は1901年にジョン・ライランズ図書館のものとなった。その頃、イギリスでは1850年に公共図書館法(Public libraries Act)が成立し、その歩みは漸次的であったが、読書への期待と機会は市民のあいだにも開かれていった⁵⁸。古書もまた流通しやすい状況が生まれただろう。

東北(帝国)大学附属図書館には大正14年・15年(③

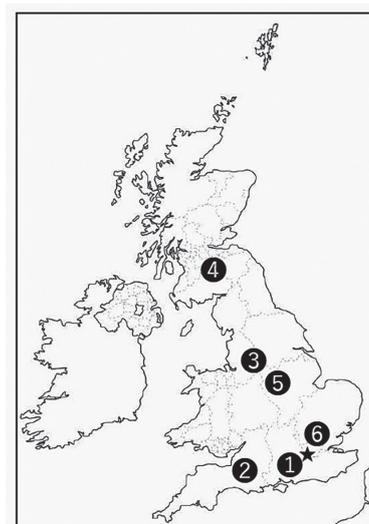


図19 紋章付き蔵書票所有者の居住地分布

- ★ London
- ① Albury Park, Surrey
- ② Ilchester, Somerset
- ③ Haigh Hall, Lancashire
- ④ Carstairs, Lanarkshire
- ⑤ Middleton-by-Youlgrave, Derbyshire
- ⑥ Cassiobury House, Hertfordshire

⑤⑥)、昭和15年(④)、昭和39年(②)に受入れられており(①は不明)、直接の入手経路が推定されたのは現段階では⑤ホップズ『市民論』(1669年刊)のみであるが、おそらく東北帝国大学法文学部創設前後の欧州留学の成果が大きいのであろう。彼らは潤沢な図書費や当時のインフレーションなどにより、かなり有利な条件で図書資料を買い付けることができた。

しかしながら、それらを着実に継承し、そこに新たな価値を見出し、また、付け加えていくのは、われわれの努めでもあるようにおもう。

本稿で扱うことができた紋章付き蔵書票以外にも、やはり注目すべきものが多い(図20)。それらの紋章付き蔵書票の分析は次稿を期したい。

Armorial Bookplates on the Old Books

in Tohoku University Library

by OGAWA, Tomoyuki

Summary

Tohoku University Library has established in 2021 a new classification as Seiyoh-Koten for the European Old books. The number of the books is approximately 5,000. Half of

57 三浦太郎編著『図書・図書館史』(講座 図書館情報学12) ミネルヴァ書房, 2019, 第4章参照

58 上掲書第8章参照。

them have just been surveyed at this time, and 15 Sorts of Armorial-bookplates were found.

Six Sorts of them belong to (1) Henry Drummond, 1786-1860, (2) Stephen Fox, Earl of Ilchester, 1704-1776, (3) Bibliotheca Lindesiana (Alexander William Crawford Lindsay, 1812-1880; James Ludovic Lindsay, 1847-1913), (4) William Fullerton of Carstairs, 1720-1806, (5) William Bateman of Middleton-by-Youlgrave, 1787-1835, and (6) Algernon Capell, Earl of Essex, 1670-1710.

Many of them expanded their inherited book-collections in the late 18th and 19th centuries, and later gave them up for various reasons. Tohoku Imperial University had purchased those books locally by professors who studied in Europe in the early 1920s.

(おがわともゆき, 学術資源研究公開センター・
総合学術博物館助教, 附属図書館協力研究員)

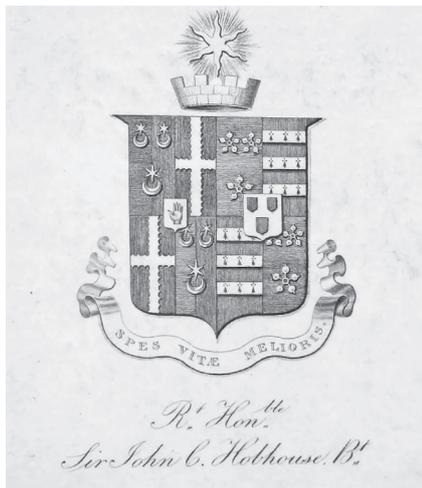


図 20 現時点で見出された、他の紋章付き蔵書票